

---

皮膚科の臨床 第42巻 第13号 (2000年12月1日発行)

---

皮膚臨床

## Von Dem Grau Bis Zum Bunt (84)

——ムラージュ知見補遺(4)——

上野 賢一

---

金原出版株式会社

---

随 想



# Von Dem Grau Bis Zum Bunt (84)

——ムラージュ知見補遺 (4)——

上野 賢一\*

“Microscopia”誌 (17: 116-117, 2000) に Susini の蠟標本に関する Riva の著書の紹介があり、その訳者瀬川彰久氏 (北里大解剖) においてこの本を入手することができた。Alessandro Riva 著, 瀬川彰久訳 “ワックス解剖標本, クレメンテ・スシーニ作, カリアリ大学所蔵” (Le Cere Anatomiche di Clemente Susini dell’Università di Cagliari) である (図1)。

Susini の歴史的芸術的名作というべき蠟解剖標本の価値を再認識し、それを広く世に知らしめんとするために、現カリアリ大解剖学主任教授 A. Riva が、同大解剖学初代教授 Antonio Boi 就任二百年を記念して、伊・英語で執筆された 48 ページの袖珍本で、これを瀬川氏が邦訳されたものである。

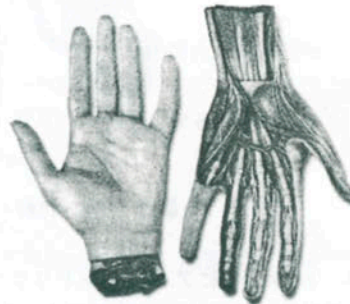
ここに出ている人体蠟模型の精巧さには驚かされる。当時のイタリアの芸術的技術の高さには全く脱帽である。

74 項 (本誌, 42: 291-293, 2000) において, C. Susini の蠟模型が多数サルデーニャ島のカリアリ博物館に残っていると記したが、その詳細をこの本であらためて知ることができた。

サルデーニャ島 (Sardegna) の王 Carlo Felice (1765-1831) は若い解剖学者 Francesco Antonio Boi (1767-1855) のパトロンとなり、彼をしてイタリア各地 (とくにフィレンツェ) の解剖学教室に留学させ、とくに同地において Susini の蠟模型を購入するように命じた。Boi はパピア, ピサと回ってフィレンツェに至り、解剖学の盛んな L’Arcispedale di Santa Maria Nova 校に学び、この校長の Paolo Mascagni (1755-1816) を介してその友である La Specola 創立者 Felice Fontana (1730-1805) と知り合い、Susini の蠟標本を多数購入することができた。Caro Felice はこれをまず Museo di Antichità e Storia Naturale

## Alessandro Riva Le Cere Anatomiche di Clemente Susini dell’Università di Cagliari

ワックス解剖標本  
クレメンテ・スシーニ作  
カリアリ大学所蔵  
著 アレサンドロ・リバ  
訳 瀬川彰久



Università degli  
Studi di Cagliari  
CIMAS, Centro  
Interdipartimentale  
per i Musei e  
l’Archivio Storico  
Dipartimento di  
Citomorfologia  
Comune di Olzai

図1 「Susini の蠟標本」に関する Riva 著, 瀬川訳の本の表紙

に収め、1858 年にはさらにカリアリ大学解剖学研究所に移管、展示した。これはのちに Riva によってアルゼナーレ広場市立博物館 Citta della dei Musei di Piazza Arsenale に移された。ここでこの貴重な歴史的標本が現在公開展示されており、解剖学的標本に関しての一大メッカとなっている。

このような精巧な蠟模型が造られるようになったのも、医学教育上、あるいは芸術的必要性に由来する。本物、つまり屍体が常に容易に観察されるならこれに越したことはないが、人体解剖は古代からいろいろの制約——宗教的、政治的、感覚的——を受けてきている。

\* Kenichi UYENO, 筑波大学名誉教授

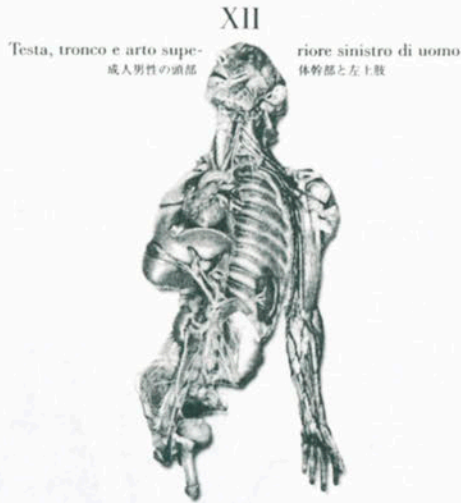


図2 頭部・体幹・上肢



図3 頭頸部

BC 300 年にアレキサンドリアで二人の死刑囚の解剖が行われたとの記録がある。しかし古代エジプトでミイラを造る際には内臓を除去しているの、宗教的に意味のある人体解体は当然容認されていたのであって、医学的・芸術的目的でのそれが許可されなかっただけなのであろう。

文化の進んだイタリアでも、十三世紀にはサレルノ大学で許された人体解剖は5年に1体であり、ポローニャ大学（創立1260年）での最初の解剖は1302年になってからである。

フランスでは、当時医学の中心であったモンペリエ大学でも1340年になり2年に1体の解剖が許された程度である。

イギリスでは1540年にHenry八世により年に4体、1565年Elizabeth一世により同じく年4体の解剖が許されるようになった。

ルネッサンス時代（十四～十六世紀）には教皇や教会の許可の下に解剖数も増えてきたが、やはり屍体数は十分ではなかった。死刑囚に限られていた屍体も、引き取り手のない屍体、公費で埋葬される屍体に拡大されたが、それでももちろん十分でなかった。解剖が医学や芸術のためという学術的な明快なコンセンサスのなかったことが大きな一因であったことであろう。重罪人に対する天罰であるといった考えさえあったほどである。

ともあれ、これら蠟模型は立体的に極めて複雑であり、皮膚に限局したムラージュの制作に比べれば容易

ではないであろうと、その疑問を瀬川氏に質したところ、幾つかの文献を送って頂いた。基本的には（ネガチフを取り、これからポジチフを取る）ムラージュと同じであったが、立体的構造が複雑であるので、より細かい操作が必要である。

1) まず解剖を解剖学者によって行う。

2) この解剖体ないし体部からしっくい (plaster) を用いて鋳型 (cast) をとる。この鋳型に蠟を満たしてポジチフを造る。このときは解剖学者の直後の指導の下に有能な彫刻家が手を加えて実物に近いモデルとする。

3) しっくい直接に型を取りにくい場合は、熟練した芸術家が解剖体を前にして粘土か蠟でそっくりのコピーを作り、これから鋳型を取る

掲載した写真からも解るように、例えば図1のような手では、血管、腱、神経、筋肉などは別に造って組み合わせていくのである。図2はこれに加えて肝臓や心臓が別に作られて加えられている。

鋳型（ネガチフ）は保存しておけば複製が可能であり、La Specolaの貯蔵庫にはこれが多数保存されている。

ポジチフとなる蠟の調整が作品の出来を決める大きなポイントであることは、ムラージュの場合と同様である。種々の工夫があり、制作者それぞれの特技でもある。弾力性を上げるためにテレピン油を1:10の割合に加える、融点を上げるために虫の蠟を混ぜる、錫鍍金の銅の大きな鍋に入れ、徐々に鯨油とラードを加えながら水浴上で加熱し、予め調整された色素を加えて

## Tavole 一覧表



図4 顔面・眼窩



図5 頭蓋内

色を出す。組織の種類によって用いられる色素が当然異なる。

鋳型は生温い水で暖めておき、内側に軟らかな石鹼を塗って小さい孔を目貼りし、またポジチフの剝離が容易になるようにする。調整した wax mixture をゆっくりと鋳型の中に注いでいく。

骨などは充実したポジチフであるが、大多数は中空で、そこには温かいうちにガーゼ、ぼろぎれ、麻屑、蠟をしみこませた木片などが詰め込まれる。立像などでは、ざらざらした鉄棒を蠟をしみこませたぼろぎれでつつんだものを巻き付けて心棒とする。

ポジチフはブラッシュで表面を平滑にし、また必要な凹凸を付ける。

血管・神経・リンパ管がこれに付けられる。血管・神経は蠟でコートされたワイヤか木綿糸で造る。太い脈管は蠟を円柱状にして造っていく。リンパ管の節々ある外観は、糸を生温い蠟に浸し、急に引き上げるとひたひたと落ちて節状となる。透明な膜を作るときは、無色の蠟を、少し温めた大理石板の上に置き木製の円柱で圧延する。動脈・静脈・リンパ管・神経はそれぞれ一定の色にする。

このようにその制作過程は、ムラージュのそれに比すれば極めて複雑であるが、ムラージュの兄貴分ともいべきこの体部蠟模型も、われわれ皮膚科医にとっ

さらに、スカルロは1786年にフェリチーニ・フォンタナの前、グレゴリオ・フォンタナ Gregorio Fontana (1735-1803) 教授に次の手紙を送っており、これを読めば、なぜこんなにワックス標本が正確に作られたのか納得できます。[ラスペコラ博物館にあるワックス標本で、風体なしに作られたものはひとつもない。また、フォンタナはいかに有名な解剖学者が描いたものであろうと、それまでに出版された解剖図など全く引用しなかった。]

カリアリ大学所蔵のワックス解剖標本は23個の本製の台に安置され、そこにはスリーニ自身のサインと目付が書かれています。これらの標本はフィレンツェで1803-1805年にかけて作られました。その時期はラスペコラ博物館 (Lanza et al. 1979; Hilloowala et al. 1985; ヨセフィウム博物館 Lesky, 1977) 所蔵の標本より後ですが、複製ではありません。カターネオ(1970)も強調しているように、カリアリのワックス標本は、スリーニがその晩年に、芸術家としての才能を華麗に花ひらかせたことを実証するものに他なりません。"本物をこえた出来映え" (Lanza et al. 1979) と絶賛される

標本の一つとして、ここに顔の標本をあげてありますが、造形の美を見事に結晶させた傑作といって過言でないことがわかりいただけるでしょう。

ては興味の深いところといえるであろう。あえて細かく記述した。

瀬川氏の論文の最後に、イタリアの優れた蠟解剖模型が展示されている施設の名が紹介されている。ムラージュに興味をお持ちの方には参考になるかと思い、そのまま引用しておく。

カリアリ博物館

Museo Anatomico

Via Cittadella dei Musei-Piazza Arsenale Cagliari

ナポリ大学博物館

Museo Anatomico

Via L. Armanni 5 Napoli

フィレンツェ・スペコラ博物館

Museo Zoologico "La Specola" dell'Università a Firenze

Via Romana 17 Firenze

ボローニャ大学

Museo delle Cere dell'Istituto di Anatomia Umana

Via Innerio 48 Bologna

種々御教示を賜った北里大学解剖学教室瀬川彰久先生に、心から御礼申し上げます。